

【85】古代ギリシャの面白い哲学者

近代の哲学者というと、カント、ヘーゲル、マルクスだと、名前を聞いただけで重々しく、その主張の理解を別にして近寄り難く、どこか鬱陶しい存在です。

そこへいくと、二千年以上も昔の古代ギリシャの、人類の精神文化の開拓者のような哲学者たちは、伝えられる業績は別にしても、親しめる感じがするのです。

それは彼等にまつわる逸話の数々が、人間味にあふれていて、昔の事なのに現代の我々も共感して笑えるからです。

前置きはこのくらいにして、その逸話の私の好きないくつかを曾孫引きで紹介します。

逸話の主の年代順です。

ソクラテス

若者を墮落させたと、”不敬神罪”とやらでアテネで死刑の判決を受け、自殺させられた人です。奥さんのクサンティッペが猛妻として有名で、ソクラテスは恐妻家のパイオニアでもあります。

ソクラテスの言葉に、

”結婚しなさい。良妻を得れば幸福になれるし、悪妻を得れば哲学者になれる。”というのがあります。奥さんに叱られて、頭から水を浴びせられた時、”雷のあとには雨が降る”と平然としていたそうです。

デモクリトス

現代にまで通じる「原子論」を提唱したことで有名な哲学者ですが、目が見えると雑念が生まれ思考の妨げになるとして、自分の目をつぶしたという笑えない逸話の持ち主です。

ディオゲネス

家に住まわず樽の中で犬のような生活をした犬需派の創始者です。

名声を知ったアレキサンダー大王がわざわざやって来て樽の前に立ち、”余に何か出来ることはないか”と尋ねたところ、”寒くてかなわないから太陽の前に立たないでくれ”と言ったとか言わなかつたとか。映画「アレキサンダー大王」（主演リチャード・バートン、1956年）でその場面が復元されていました。

アリストテレス

あらゆる分野の学問の祖とされる博学の士ですが、ある夜、天文の研究で夜空を熱心に見上げていてドブに嵌ったのを、側で見ていた老婆に”遠い星々のことに詳しい先生が足元の事に気付かない”と笑われたことは、よく知られた話です。

アルキメデス

古代ギリシャからヘレニズム時代をすぎ、ローマ時代初期のシシリ一島のシラクサの人です。

シラクサの王様から、金製と称する王冠が純金か合金か鑑定せよと難題を持ちかけられ、悩んでいたある日、公衆浴場で湯船に浸っていて、身体が軽くなることから浮力の法則（アルキメデスの法則）と比重の考えが閃きました。

これは王冠の鑑定に使えると、アルキメデスは風呂をとび出し、裸のまま街中を”わかった、わかつた”と叫びながら走って自宅へ帰りました。

今でいうストリーキングの元祖ですが、2200 年の昔にナウイものですね。